

ねえ、先生

先生。ねえ、先生。

わたしのことどうか嫌ってみせて。

「中東に住んでいた頃は、サソリだって見慣れてたんだけどね。毎朝靴の中に入り込んでないか確認するのが日課だったんですよ」
子どもの頃、世界中を点々としていたという先生は、恥ずかしそうにそう言った。今はすっかり、虫は苦手になってしまいました

たねえ。生物の先生らしからぬ言葉に、教室の中に笑いが起きる。わたしはちっとも面白くなくて、ノートの隅にサソリの絵を描く。しっぽのところがむちむちとした、毒々しい、かわいくないサソリ。ちよつと空想が入っているかもしれないけれど、リアルに描けた。

絵を描くのは、なんにもないわたしの、ただひとつの取り柄みたいなものだから。

こんなにリアルに描けるのだから、このサソリが実体を持って、どうか先生を突き刺してくれればいい。

そうしたら、きっと、先生は、わたしを嫌いになってくれると

思うから。

「人間を殺すほどの毒をもったサソリは少ないんですけどね。それより、靴の中で潰れてしまう方が困ったもので……あ」

時計を見て先生が声を上げる。すみません、無駄話をしているうちに授業が終わってしまいますね。今日はノートを回収します。理科系の人は放課後までにノートを持ってきてくださいね。

ハキハキと先生がそう言って、言い終わったとき、チャイムが鳴った。嬉しそうに先生が笑う。この後は昼休みだ。

号令がかかって席を立つ。二つ隣の席の中島が、購買へのスタートダッシュを決めようと、そろそろと席から離れていく。先

生が眼鏡の奥でそれを見つけて、困ったみたいに笑った。ぽっとしない先生。浮き足だった教室の雰囲気。馴染めないまま、わたしは浅く礼をする。

先生。ねえ、先生。

わたしのことどうか嫌ってみせて。

あのまま提出したノートは、サソリの隣にハナマルがついて返ってきた。それは別に、サソリについたハナマルではなくて、単に最後のページだったからだ。先生はいつも、チェックした

ノートにいびつなハナマルを描く。

コメントも小言も特にないまま、何事もないみたい毎日進む。実際、そうだ。何もなかったんだ。人間を殺すほどの毒を
持ったサソリは少ない。わたしは先生に嫌われてなんかいない。

まち針を布に突き刺す。布がずれてしわが寄ったけれど、直す
気にはならなかった。やり直したところでうまくいく気がしない。
わたしは不器用だし、何よりやる気が全然ない。どうして家庭科
は必修なんだろう。

この学校に来る前は、もっとずっと偏差値の低いところに勤め
てたんですけどね。親指でしわを伸ばしながら、先生の話の思い

出す。先生の授業は無駄話が多い。中途半端なヤンキーみたいな生徒ばかりだったんですけどね、でも、みんな、なんだかんだ、いい子たちでしたよ。そう言った目は笑っていた。だからちよつとくらいガラの悪い子を見ても、遠巻きにしないであげてくださいね。柔らかい声。先生は優しい。

しわを伸ばすには最初からやり直すしかなさそうで、どうしようもなく、もうひとつまち針を刺す。小学生の頃から使っているまち針は、お尻についた花形のプレートひとつひとつに名前が書いてある。加藤。加藤。加藤。わたしはすぐに物をなくすから、なくさないようにとお母さんが書いた。藤の字は潰れている。加

藤。加藤。ずらりと並ぶ名前が恥ずかしい。

キリがいい人から終わりにして良いよ。本橋先生がそう言ったので、布きれを裁縫箱に押し込んで席を立つ。たくさん刺した待ち針が、たくさんの布を巻き込んで突き刺して、裁縫セットの外にまで突き出ている。一本抜き取って袖口に隠す。加藤。毒々しい、ショッキングピンクのまち針。

ひとり教室を出て、流れに逆らって職員玄関へ。先生の靴は知っている。つま先のすり切れた、学生みたいな黒いローファー。その奥にそっと、まち針を隠し入れて外に出た。今日は焼けるように日差しが眩しい。

先生。ねえ、先生。

優しいあなたが嫌いな。

どうか、わたしのこと、どうか。

それから数日、何事もなく過ぎた。先生が足を引きずってくることも、わたしが呼び出されることもなかった。そっとまち針が返ってくるようなことももちろんなかった。広げた生物のノートには、鉛筆で描いた不細工なサソリと、朱赤のハナマルが並んでいる。

最初はドキドキしていたけれど、二週間が経つ頃にはわたしは失望しきっていた。先生、もしかして足の感覚がないんじゃないのかな。

そうして、もうすぐ三週間に届きそうという時、加藤さん、と声がかかった。柔らかい、先生の声だった。

「ちょっと話があるから、一緒に来てもらって良い？」

分かりました。固い声で答えて、わたしは先生の後を歩く。近くにいた人が少し訝しげにわたしたちを見た。

わたしだって訝しい。だって、もう、今更なんじゃない？

階段を一つ上って、連れられてきたのは理科準備室だった。

人はいなかった。

コポコポと空気の音がする。金魚と、メダカと、そういう、ありふれた魚が水槽に詰め込まれている。ここの水槽は先生が世話をしているのだと言っていた。丸い石が敷き詰められた水槽には、藻一つない。チューブがふたつ繋がっていて、水草が生い茂っている。

冨島先生今授業だから、ここ座って大丈夫。先生はそう席を勧めて、自分の椅子に座った。理科の先生はここに机を持っているのだ。

「それでね、ちょっと、聞きたいんですけどね」

「なんですか」

先生は、言いづらそうに、青みがかった目でわたしを見る。先生はどこだかの国と日本のハーフで、そして全然、かっこよくない。ただ、目だけはキラキラして綺麗だ。

「加藤さん、誰かにいじめられてたりしないよね」

「……は？」

何を言われているか分からなかった。わたしの反応を見て、

うーん、それじゃあ拾ったのかなと先生が言う。何が言いたいのか分からなかった。にらみつけるように先生を見る。そんな怖い顔しないでと先生が笑う。

「いや、その、僕の靴に、これが入ってたもんだから。加藤さんのでしょう」

先生は、袋に入れたまち針を取り出した。

毒々しいシヨッキングピンクの、少し曲がったまち針。

「いやあ、この学校加藤さんがいっぱいいるから、見つけるのに時間がかかったんですけどね。だって、加藤さんこんなことする子じゃないじゃない」

「どうしてそう思うんですか」

「え？ うーん、だって、大人じゃないですか、加藤さん。でも、だから少し、何かあったんじゃないかって、心配で」

先生は笑う。僕はちゃんと見ていますよみたいな顔で笑う。履く前に気付いたから僕の足は無事なんですけどね。そうやって、傷ついてませんよって、笑う。

笑う。

「……別に、いじめられてないです」

絞り出すようにわたしは言う。誰にも馴染めないけど、いじめられてなんかかないです、わたし。絵を描いていたら楽しいし、かわいそうなんかじゃないです。わたしは。

先生。ねえ、先生。どうか。

「ああ、そういうえば、生物のノートに描いてあったサソリ、上手でしたよね。開いたとき、ちょっとびっくりしました」

先生はそう言って、わたしは膝の上で手を握りしめる。

次の授業が始まってしまいうので。そう言って、立ち上がる。

「加藤さん」

先生が、優しい目でわたしを見ている。

「何か悩みがあったら、いつでも相談してくださいね」

先生に、宝物みたいに大切にされている水槽の横を通って、わたしは廊下に出る。

先生。ねえ、先生。

どうかわたしのこと嫌いになって。

それでもいい子だったなんて笑わないで。

あなたにとって大したことじゃなくても、わたしにはとびきりの勇気だったんです。あなたのことが嫌いなんです。

先生。ねえ、先生。

どうか、わたしのこと、どうか、優しい過去になんかしらないでいて、先生。

作：酒田 紺／よふかしわーくす
発行：2019/11/24
連絡先：mail@kon.blue
twitter：@sakatakon
web：http://kon.blue

Copyright © 2019 酒田紺 / よふかし
わーくす
本書の無断転載、複製・複写は
固くお断りいたします。